



Title	Far from the Madding Crowd について -Wessex の誕生-
Author(s)	宮本, 義久
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1977, 17, p.71-82
Issue Date	1977
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/9662">http://hdl.handle.net/10069/9662</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-23T12:51:18Z

# Far from the Madding Crowd について

— Wessex の 誕生 —

宮 本 義 久

## On *Far from the Madding Crowd*

— the birth of Wessex —

YOSHIHISA MIYAMOTO

### I

*Far from the Madding Crowd* は、「コーンヒル」誌を主宰するレズリー・スティーヴンが、*Under the Greenwood Tree* に感銘を受け、<sup>①</sup> その依頼に依って執筆された。この小説は、1874年1月号から、12月号に亘って、同誌に匿名で連載された。*Under the Greenwood Tree* で好評を得たハーディは、既に「ティンズレー」誌の求めに依り、*A Pair of Blue Eyes* を、1872年9月号から、翌年7月に亘って連載中であった。*Far from the Madding Crowd* が、「コーンヒル」の1月号の巻頭を飾った時、「スペクテーター」誌が、これを、当時最大の作家、ジョージ・エリオットの作ではないかと、憶測したというエピソードは、余りにも有名である。<sup>②</sup> この小説が、ハーディの出世作となり、此処に彼は、名実共に作家としての地位を、確立することになった。

これに先立つ、初期三小説に見られた、作家としての方向と、題材の模索を通じての、経験の積上げ、総合は、*Far from the Madding Crowd* にも引き継がれているのは、明白に看取され得るところである。要約すれば、前2作の特色を（*Under the Greenwood Tree* の、その田園的背景、*A Pair of Blue Eyes* の、女性の心理を中心とした、複雑なプロットを有するロマンス）採用し、それ等を、融合せしめているという事である。もともと、*A Pair of Blue Eyes* に見られるロマンスは、前作 *Under the Greenwood Tree* に見られた、極めて牧歌的ロマンスの延長で、それが、更に、リアリスティックに展開されたものであった。*Far from the Madding Crowd* は、更に、複雑に、リアリスティックに、一層の豊かさと充実を示しながら、前々作へと、螺旋的回帰をしたと言い得るであろう。

作者自身、後年になって付した序文で、述べている如く、‘Wessex’なる7王国時代の地名を掘り起し、それを初めて用いたのは、この小説に於てであった。ハーディは、この古代地名に依って、彼の小説の舞台を限定し、統一を与えたのである。熟知せる故郷‘Wessex’地方の田園の自然と、そこに住む人々、その生活に題材を求めるといふ彼の代表的作品に共通する、地方作家としての姿勢は、此処に確立、定着され、ハーディ独自の小説世界は、本格的に展開される事となるのである。

本小稿は、前2作の主要素を中心に検討を加えて、この作品の、主題の考察を目指すものである。

## II

*Far from the Madding Crowd* に於いては、Merryn Williams の指摘する<sup>9</sup>如く、作中人物は、農村生活への関与度、貢献度に応じて、善乃至悪として性格付けがなされている。それが、この作品解明のポイントを示唆するものである。加えて、人物の幸、不幸の運命も、それに依りて決定されていると言い得る。結局、この小説は、後のハーディ小説と比較して、極めて楽観的な小説であり、その点が、良くも悪くもこの小説の特徴なのである。

古来からの伝統的な、農村生活様式の体現者としての羊飼、ゲイブリエル・オーク。ゲイブリエルと全く対照的な立場に、トロイ軍曹。彼は、農村生活への寄生者であり、破壊者である。そして、以上二人の中間に位置する、中年の農場主ボールドウッド。これ等三人の男性に対して、女農場主、バスシーバ・エヴァディーンが配されている。そして、彼女を巡る複雑な男女関係が、舞台の前景で演ぜられながら、プロットは進展してゆく。ゲイブリエルが、農村世界の中心であるのに対し、ロマンスの中心は、バスシーバであり、同時にトロイ軍曹を巡る、バスシーバと、貧しい村娘、ファニー・ロビンの三角関係が、密かに存在している。そして、その背景では、日常的な農村の生活風景が、永遠に巡る自然界の季節に応じて、連綿と続く年中行事を中心に展開される。羊の出産の世話、羊洗い、剪毛はさみ研ぎ、続く羊毛刈りと、その慰労の晩餐会、干草作り、麦の取入れと、その祝いの会、羊の市等である。

大自然のリズムに歩調を合せた、農村行事の内、羊飼いの年中暦的仕事を描く場面にて、作者は、農村生活の意義と価値を、最も積極的に示す。中でも、作者の田園生活に対する態度を、明確に示すのは、羊毛刈りの行われる、大きな古い納屋についての描写である。納屋の中では、‘an epitome of the world’s health and vigor’ (p. 120) さながらの姿の、ゲイブリエルを総監督として、剪毛が行われているのである。

One could say about this barn, what could hardly be said of either the church or the castle, akin to it in age and style, that the purpose which had dictated its original erection was the same with that to which it was still applied. Unlike and

superior to either of those two typical remnants of mediaevalism, the old barn embodied practices which had suffered no mutilation at the hands of time. Here at least the spirit of the ancient builders was at one with the spirit of the modern beholder. Standing before this abraded pile, the eye regarded its present usage, the mind dwelt upon its past history, with a satisfied sense of functional continuity throughout—a feeling almost of gratitude, and quite of pride, at the permanence of the idea which had heaped it up. The fact that four centuries had neither proved it to be founded on a mistake, inspired any hatred of its purpose, nor given rise to any reaction that had battered it down, invested this simple grey effort of old minds with a repose, if not a grandeur, which a too curious reflection was apt to disturb in its ecclesiastical and military compeers. For once mediaevalism and modernism had a common standpoint... The defence and salvation of the body by daily bread is still a study, a religion, and a desire. (pp. 164-65)

4世紀の歴史を持つこの納屋は、同様な古さと形を有する教会や城が、心情的影響は別として、知的には、中世の代表的遺物として、扱えられるに過ぎないのに対して、その目的と機能を、変ることなく保持し続けているのである。何故ならば、「日々の糧による、肉体の防御と救済」は、不変の必要である故である。この納屋は、「時」によって損われることのない、不変の価値を具現するのである。過去と現在の調和、確固とした不動性、永続性が示されるのである。

This picture of to-day in its frame of four hundred years ago did not produce that marked contrast between ancient and modern which is implied by the contrast of date. In comparison with cities, Weatherbury was immutable. The citizen's *Then* is the rustic's *Now*.... Five decades hardly modified the cut of a gaiter, the embroidery of a smock-frock, by the breadth of a hair. Ten generations failed to alter the turn of a single phrase. In these Wessex nooks the busy outsider's ancient times are only old; his old times are still new; his present is futurity. (p. 166)

納屋の有する不変性は、ウェーベリ村の有する不変性——住民の生活様式、文化（服装、言葉使い等）の不変性——へと、作者の視野は拡大される。不変の生産形態から、不変の文化形態へと、視点が移るのである。そして、

So the barn was natural to the shearers, and the shearers were in harmony with the barn. (p. 166)

と、納屋に調和して、永遠に繰り返される田園の仕事に従事する人々が、描かれるのである。彼等の生活は、自然と、自然に則した、古来よりの慣習に根差したものである。その仕事は、不変の必要性に基づいた生産であり、その生産様式は、共同作業を不可欠とする。ウェーザベリの村は、総じて、調和と秩序とを、読者に印象付ける共同体である。

作者は、「時」に依る変化を殆んど受けることのない、この「ウェセックス」の片田舎の村を、当然のことながら、都会と対照させる。

It was the first day of June, and the sheep-shearing season culminated, the landscape, even to the leanest pasture, being all health and color. Every stalk was swollen with racing currents of juice. (p. 163)

自然の健康と、彩りに満ちた姿を述べた後、作者は、「神は、田園にいるのが明白に感じ取られ、悪魔は、世界の人々と一緒に、都会へ行ってしまっていた。」(p. 163)と、意味深い文で、それを結ぶ。自然に根差さぬ生活の場である都会は、急速な変化と、絶えざる刷新の場として、把握されているのである。

作者は、この様に、都会に対して、田園の生活形態を優位に置き、両者の対立の要素をかなり含みながらも、この小説は、必ずしも、その対立的見地のみでは、説明し尽くされ得ないものを含んでいる。此处で、田園の秩序と調和を乱すものは、すべて都会的なものであるとは言えない故である。それは田園内部にも潜んでいるのである。以下、田園生活の安定性への、破壊的要素について、検討してみたい。

### III

田園生活の中心であるゲイブリエルは、他の登場人物を、評価するにあたり、基準となる人物である。彼は、祖父、父に継いで、三代目ゲイブリエル・オークを名乗り、父の後を継ぎ、羊飼いになった事が示す如く、古い伝統の継承者である。彼は、'a man who clung persistently to old habits and usages, simply because they were old' (p. 381) である。そして、

...although if occasion demanded he could do or think a thing with as mercurial a dash as can the man of towns who are more to the manner born, his special power, morally, physically, and mentally, was static.... (p. 11)

と、'mercurial' な都会人に対し、彼が万事 'static' である事を身上とし、変化の少ない、安定した人間であることを示す。他の主要人物に欠けている、彼の最大の内的強みは、

...among the multitude of interests by which he was surrounded, those which affected his personal well-being were not the most absorbing and important in his eyes. (p. 338)

という点である。万事自己中心的見地に立たず、従って、寛大で自制力と、忍耐力に富む。作者は、ゲイブリエルの有する田園的美徳を強調する。ノークームでの彼の生活を描く序章部で、彼は、バスシーバへの求婚に失敗するが、その原因を作者は、

Farmer Oak had one-and-a-half Christian characteristics too many to succeed with Bathsheba : his humility, and a superfluous moiety of honesty. (p. 35)

と説明する。又、ゲイブリエルが、未熟な牧羊犬が、羊を大量に死に至らしめた事に依り、‘a pastoral tragedy’ (p. 37) に終るとは言え、序章部に於て一旦は農場主の地位を得る事が出来たのも、彼の10年に亘る、‘energies, patience, and industry’ (p. 41) の賜物であったのである。この二つの ‘misfortunes, amorous and pastoral’ (p. 47) は、彼にとって、成熟の為の良き試練となるのである：

Gabriel was paler now. His eyes were more meditative, and his expression was more sad. He had passed through an ordeal of wretchedness which had given him more than it had taken away...; but there was left to him a dignified calm he had never before known, and that indifference to fate which, though it often makes a villain of a man, is the basis of his sublimity when it does not. (pp. 43-44)

試練に依って生じた、彼の ‘indifference to fate’ が、ストイックな忍耐力を支えるのであり、

“...nothing happens that we expect,” he added, with the repose of a man whom misfortune had inured rather than subdued. (p. 295)

という文に見られるような、ベシミストの強さを作り出すのである。

しかしながら、彼の美德、内的強靱さと共に、彼が ‘a clever man in talents’ (p. 157) であった事も、見逃せない。彼は、羊飼いととしての、特殊技能を身に付けていた事は勿論であるが、幼時から馴じんだ生活の経験から、夜空に輝く星を、最上級に美しい芸術作品として、鑑賞すると共に、時刻を知る為の、‘a useful instrument’ (p. 13) として見る、実用的知識を持ち、大小の動物の動作、状態から、自然の女神の託宣を読み取り、天候の変化の、正確な予知も出来るのである (Chapt. XXXVI)。農場の仕事は、自然の為すがままに任せる事で、成り立つ訳ではない。自然は、生み育てる慈母の如くであると共に、苛酷な破壊者でもある。即ち、自然を利用する立場に立つには、自然の現象、その生産的、及び破壊的働きに対する知識と、それを生かす、技能の裏付けが必要である。ゲイブリエルは、この点でも優れているのである。注目すべき事は、彼は決して反文明的ではないという事である。彼は、少数ながら、獣医学関係や、算術の実用書を持ち、‘sound’ (p. 79) な知識を得ているのである。又、聖書は当然として、「失楽園」「天路歷程」等のピューリタン文学を、愛読書とするのは、当然ながら、彼の試練と倫理的特性に結びつく。

ゲイブリエルの、対極に位置しているのが、トロイ軍曹である。彼は総ての点で、主人公とは逆の人物として、設定されていることは、明白である。トロイは、伯爵とフランス女性との間に生れた落胤で、高い学歴を持つと共に、完全な利己的享楽主義者である。

He was a man to whom memories were an incumbrance, and anticipations a superfluity. Simply feeling, considering, and caring for what was before his eyes, he was vulnerable only in the present. His outlook upon time was as a transient flash of the eye now and then: that projection of consciousness into days gone by and to

come, which makes the past a synonym for the pathetic and the future a word for circumspection, was foreign to Troy. With him the past was yesterday ; the future, to-morrow ; never, the day after. (p. 190)

又は,

...his activities..., never being based upon any original choice of foundation or direction, they were exercised on whatever object chance might place in their way. (p. 191)

は、この 'erratic child of impulse' (p. 202) が、作者が、その特色を、急速な変化、刷新として扱った、都会の生活様式の軽薄なる代表者であり、田園生活様式の特色たる、恒久不変性の、アンチテーゼであるとされていることは、疑いを入れない。

Troy's deformities lay deep down from a woman's vision, whilst his embellishments were upon the very surface ; thus contrasting with homely Oak, whose defects were patent to the blindest, and whose virtues were as metals in a mine. (p. 215)

此所に、トロイとゲイブリエルに依って代表される、外観と実体とのコントラストが、示されるのである。トロイとゲイブリエルの持つ、対照的な好みの相違——トロイの、表面的 'embellishments' (それは彼に取っては、即モダンということである) への愛好と、ゲイブリエルの、古い物への愛好——は、バスシーバの住む、古典ルネサンス初期の建築様式の、古い家に対する評価の対立にも表わされている：

'A rambling, gloomy house this,' said Troy, smiling...

'But it is a nice old house,' responded Gabriel.

'Yes—I suppose so ; but I feel like new wine in an old bottle here. My notion is that sash-windows should be put throughout, and these old wainscoted walls brightened up a bit ; or the oak cleared quite away, and the walls papered.'

'It would be a pity, I think.'

'Well, no... I am for making this place more modern, that we may be cheerful whilst we can' (p. 271)

トロイは、その表面的華やかさ、即ち、血統と学歴、美男子振り、目立つ軍服姿——'a scarlet and gilded form' (p. 259)——と、巧みな弁舌——'a winning tongue' (p. 179), ——に依って、彼の束の間の気紛れな衝動に従って、世間知らずの娘を、次々と不幸に陥れてゆく。'Nothing has prospered in Weatherbury since he came.' (p. 426) と評されるトロイは、この田園にとって、'the devil' (p. 197) のイメージを喚起する。彼は、'a trickster' (p. 260) であり、ボールウッドは、彼を 'a juggler of Satan' (p. 268) と呼ぶのである。都会人に付けられた 'mercurial' (p. 11) という形容詞は、トロイのものでもある。幼時に、ウヰザーベリで育った彼は、悪魔の住む都会——ファニーとバスシーバにとっても、田園から都会へ出る事は、不幸を

背負い込む事であった——から、彼自身悪魔となって帰って来た事を、示唆すると解してよいであろう。そして、サタンたる彼の 'devilry' (p. 188) に 'counteract' (p. 333) して、バスシーバを、絶えず守ろうとするのが、大天使ゲイブリエルの名を持つ、主人公であると言えよう。

女主人公バスシーバは、物語の前半では、まだ世間知らずの、衝動的で、虚栄の強い乙女として描かれる。初登場の場面での彼女は、真赤なジャケット姿で、派手な装飾的馬車に乗り、ノークームへ引越して来る。トロイ同様、彼女は、周囲の生活、風景とはそわぐない都会的雰囲気を持つ扮装なのである。その馬車の上で、人目のないのを見計らい、手鏡に映った彼女自身の顔に、讚美の微笑を浮かべながら、赤くなる様子は、彼女の虚栄心と同時に、その行為を、端ない事と判断する 'Her simple country nature, fed on old-fashioned principles' (p. 337) を示すと言い得よう。

彼女の両親は既に亡く、叔母の厄介になりながら、乳搾りの手助けをしているとはいえ、彼女より学歴の劣る、'the middle line between the beauty of St. John and the ugliness of Judas Iscariot' (p. 6) の、平凡な容貌のゲイブリエルの求婚を、彼女が断るのは、当然と言える。

'I want somebody to tame me : I am too independent ; and you would never be able to, I know.' (p. 34)

と、ゲイブリエルを決めつける。彼女の現在の評価基準に依れば、彼は落第なのである。彼の真価を知り、彼が彼女を 'tame' し得る男であると悟るには、彼女が、現実生活の苦しい試練を経て、その評価が、虚栄に基くものから、現実に即したものと変化することが、必要となる。彼女が、叔母と一緒に世話をしている、生まれただけの子牛が、まだ視力が定まらない為に、物を見る様が 'idiotically' で、見間違いをやっているのに対して、'inherited instinct having as yet had little time for correction by experience' (p. 15) との記述は、現在の彼女を暗示している。この女主人公の変化、成熟の過程が、物語の本体部であるとの解釈も可能である。

バスシーバは、彼女の虚栄心に基づく、衝動的愚行を犯す為に、手酷い罰を受けるのである。急死した伯父の後を継ぎ、ウェザーベリの農場主になると、早速彼女は、キャストブリッジの穀物取引所に、凝った服装——'a woman's dress being a part of her countenance' (p. 83) ——で、紅一点の姿を現わし、他の農場主達の讚美的となる。彼女の虚栄心は、十分に満たされるのである：

Indeed, the sensation was so pronounced that her instinct on two or three occasions was merely to walk as a queen among these gods of the fallow, like a little sister of a little Jove, and to neglect closing prices altogether. (p. 103)

そして唯一人、彼女を無視する、貴族的な風貌を持つ農場主、ボールドウッド——'a gentlemanly man, with full and distinctly outlined Roman features' (p. 104) ——に、ほんの気紛れな悪戯心から、「私と結婚せよ」と書いた、匿名のバレンタイン・カードを送る。ところが、



彼女が戯れの種子を投げた、この威厳に満ちた中年男は、生憎なことに、‘a hot bed of tropic intensity’ (p. 138) であったのである：

That stillness, which struck casual observers more than anything else in his character and habit,... may have been the perfect balance of enormous antagonistic forces—positives and negatives in fine adjustment. His equilibrium disturbed, he was in extremity at once. If an emotion possessed him at all, it ruled him; a feeling not mastering him was entirely latent. (p. 137)

彼は、自らの情熱に支配されて、威厳も農場主の責任も放棄し、バスシーバに、道義的な責任を取る事を要求し、彼との結婚を承諾するよう、迫るのである。彼女は、ジレンマに陥る。そこへ、トロイが登場して、彼女は、たちまちトロイの仕掛けた罠に落ち、降伏——capitulation (p. 197)——してしまうのである。バスシーバを、仮想の敵として、トロイが、華麗な剣の舞を披露する場面は、極めてシンボリックである。それは、バスシーバに対する、性的攻撃の巧妙さの象徴的表現であると共に、その攻撃の、偽瞞性をも示す。トロイの剣は、バスシーバの予想に反して、剃刀の如くに刃の立てられた、危険極りない剣であった。‘the wondrous power of flattery in *passados* at woman’ (p. 192) を心得た、彼の天才的「突き」の手並みの前には、彼女のガードの構えも無力であったのである。同時に、彼女が、彼の誘惑に屈服したのは、又、彼女の虚栄心のなせる業であった。即ち、トロイの氏素姓、学歴、表面的な華やかさに魅かれた故であり、又、それ以上に、彼女の美しさに対する、間断ない、‘his bare-faced praise’ (p. 189) の快感である。作者は、‘It was a fatal omission of Boldwood’s that he had never once told her she was beautiful.’ (p. 189) と、この虚栄心のくすぐりの効果を説明する。彼女は、トロイを追って、バスの町へ行き、そこで彼と密かに結婚する。それも又、彼女の虚栄心の弱み——‘between jealousy and distraction’ (p. 290)——を、衝かれた故である。その間、麦の収穫期にも拘らず、農場を留守にし、農場主としての責任を、放棄するのである。

トロイの、農村共同体への破壊的影響は、彼が、バスシーバと結婚して、不似合いな農場主の地位に納まるに及んで、顕現する。彼が、破壊を業とする兵士であれば、当然でもあろう。

主要人物の、田園に対する姿勢は、この小説の中央部に位置し、転換点とも言える嵐の場面に於て明らかにされる。

羊毛刈りに使用された納屋で、恒例の収穫祝いが行われる。折しも、逸速く天候の変化を察知したゲイブリエルは、大雨から「麦にお」を守らねばならないことを、トロイに忠告する。しかし、農場の収穫物を守る事よりも、兵隊式の乱痴気騒ぎに関心のある、トロイにとっては、彼の忠告など、取越し苦勞としか受け取れない。しかも、この祝いの従来への慣わしは、バスシーバの反対にも拘らず、この新しい支配者に依って破られてしまう。トロイは、慣れぬ強酒を、ゲイブリエルを除く総ての男手に、解雇の威しで強要して、酔いつぶれさせてしまう。そして ‘an infuriated Universe’ (p. 287) に依って、莫大な量の麦は、危機に晒されるのである。トロイ

は、大自然の破壊力に対して、積極的に農場を、危機に陥れる手助けをする役割を演じるのである。彼は、田園の無垢と、生産性への寄生虫であり、それ以上に破壊者なのである。

ボールドウッドは、バスシーバの結婚に絶望し、故意に収穫物を雨に打たせて、失ってしまう。社会的、経済的自殺行為を犯すと共に、農場主としての責任を、完全に放棄してしまうのである。

ゲイブリエルは、単身稲妻の中を、身を賭し、工夫の限りを尽して、収穫物を嵐から守る努力をする。このような危機に陥ったのも、もとはといえば、‘the instability of a woman’ (p. 279) 故である。しかし、その為に、‘the defence and salvation of the body’ たる大量の穀物を失ってはならないという決意と、‘I will help to my last effort the woman I have loved so dearly.’ (p. 279) という、彼の不変の崇高な愛とが、彼の行為を支えている。やがて、穀物を窺ってやって来た、バスシーバの協力を得て、収穫物の防衛は成功する。ゲイブリエルは、農場の危機を救ったのである。バスシーバも又、ゲイブリエルの強力な助力で、農場主としての責任を果たしたのである。

夫として、農場主としてのトロイに対する、バスシーバの、幻滅の訪れは早い。トロイは除隊金を妻に支払させた上、ギャンブルに浪費して、バスシーバを財政的危機に陥らせる。嘗て、バスシーバの農場の召使いであった、ファニー・ロビンの、キャストブリッジの貧民救済施設での、惨めな死は、彼の旧悪の露見となって、トロイに復讐を果す事になる。そして、トロイは、農場から失踪するに至る。

バスシーバは、苦悩を味わう事で、序々に転換を始める。ファニー・ロビンへの、恋仇としての、‘a lower instinct of uncharitableness’ (p. 342) や、夫への愛着を捨て去れない、彼女の‘flesh’ (p. 341) に基く本能は、彼女の‘spirit’ (p. 341) と、激しく争いを展開する。そして、彼女の本能は、制せられ、そこに彼女の救いがある。バスシーバは、死せるファニーに、

...the superfluous magnanimity of a woman whose narrower instincts have brought down bitterness upon her instead of love (p. 368)

を持つに至る。夫の家出後は、‘Her original vigorous pride of youth had sickened (p. 373), ‘her exuberance of spirit was pruned down’ (p. 382) の状態となり、

Taking no further interest in herself as a splendid woman, she acquired the indifferent feelings of an outsider in contemplating her probable fate as a singular wretch.... (p. 373)

彼女は、‘hard prosaic reality’ (p. 456) の試練を経て、ゲイブリエル同様に、自己中心性を脱し、物事に耐える力を、得てゆくのである。そして、彼女の価値判断の基準も、変ってゆくのである。

トロイの溺死を推測させる失跡後、ボールドウッドは、バスシーバに、再び求婚するが、それは、情熱のあまりの、狂気の症候を呈する。彼は、農場の経営を、ゲイブリエルに委託する始末である。そして、バスシーバを、偶然目にしたトロイが、再び欲情に駆られると同時に、農場で

の、安楽な寄生生活を求めて、姿を現わすや、幸福の望みを、再度妨げられたボールドウッドは、彼を射殺する。反田園人でありながら、快楽を求めて、田園に寄生を計るトロイトと、田園人でありながら、狂気の情熱に駆られて、農場を放棄し、遂には、殺人という反社会的行為を犯すボールドウッド。これ等2人の、田園社会への破壊的要素は、相互の破壊力に依って、自滅するのである。

ゲイブリエルは、ボールドウッドの後を継ぎ、農場主となる。彼は、バスシーバと並ぶ社会的地位を得る。彼は又、騎士的とも言い得る献身的奉仕と、実務上の能力に依り、バスシーバの、生活の基盤である農場の危機を、再三に亘って救った。そして、彼の誠実で、誤ため倫理的判断に対する信頼に依り、彼女の‘mentor’ (p. 454) の役割を果たして来た。今や、孤独で、農場経営の自信も喪失した、女主人公にとって、彼の存在は、最早必要不可欠となっている。ゲイブリエルと、バスシーバは、此処に‘the defence and salvation of the body’ と、心のそれをも獲得したのである。かくて、主人公は、‘amorous and pastoral’ の成功を納めるに至る。ゲイブリエルと、バスシーバの結婚式は、虚栄心を捨てた、彼女の願い通りに、簡素に行われる。2人の服装も簡素——Oak in a greatcoat extending to his knees, and Bathsheba in a cloak that reached her clogs (p. 462)——である。2人は、村人達の音楽に依る祝福を受けるが、これが父祖伝来の結婚式の祝い方であり、その楽器は、

...the only remaining relics of the true and original Weatherbury band —— venerable worm-eaten instruments, which had celebrated in their own persons the victories of Marlborough, under the fingers of the forefathers of those who played them now. (p. 463)

なのである。作者は、此処に、この田園の伝統を更めて強調する。田園へ破壊的影響を及ぼした者は滅び、田園は、本来の調和と秩序を回復したのである。この小説では、‘God’s above the devil yet!’ (p. 446) である。

#### IV

*For from the Madding Crowd* に言及する時、よく引き合いに出されるのは Roy Morrell の、この小説の解釈と位置付けである。彼は、「ハーディは、彼の主要なテーマ——実際の策としてのペシミズムの価値——を、成功を納めた中心人物たる1人のペシリストを通じて、提示しているのである。彼は、このテーマを、楽天的乃至非現実的過ぎて、失敗する主人公を通じてではなく、積極的に示しているのである.... ハーディの諸小説への入門書としての、*Far from the Madding Crowd* の利点は、この小説が、積極的姿勢をとっており、他の大部分の小説の諷刺を理解する為の、基礎を提供している、ということだ。」<sup>④</sup>として、この観点から、極めて説得力のある優れた分析を行っている。そして、このペシリストたる、主人公ゲイブリエルが、作者のペ

シミスティックな人生観の、具象化されたものであることは確かである。しかし、以上で見てきた様に、この主人公は、ペシミスト、リアリストとしての面の外に、この小説の背景をなす、農村の不変に継続する生活様式の体現者、古き伝統の保持者という面をも、持つのである。この主人公の成功は、当然の事ながら、彼の体現する、農村の自然と伝統に根差した、安定した生活様式の勝利であり、その継続を示すものであると、言い得るのである。そして、此処に、我々は、作者の意図を、読み取る事が出来るのである。

Michael Millgate は、ハーディの故郷ドーセット州の当時の社会・経済状況にふれ、ハーディの初期の小説には、1870年代の、同地方の諸々の現実が反映されていない。未刊に終わった、*The Poor Man and the Lady* の経験から、政治的係り合いを避け、中立と自衛の立場を取るに至ったハーディは、*Far from the Madding Crowd* に於て、当時の社会的不安・動揺とは縁遠いものとなる様に、慎重な注意を払い、その背景を、辺鄙な場所を選び、その時代を、過去に置いているのである、と論じている。<sup>⑥</sup> 即ち、*Far from the Madding Crowd* という題名は、目前の現実状況から、掛け離れた田園世界を示すと共に、（但し、其処で起る出来事を考えると、この題名は、アイロニカルであるが）作者の現実社会への消極的とも言い得る姿勢をも、示しているのである。その結果、古い社会的因習、貧困、階級的偏見等の、社会悪の問題は勿論のこと、農村の当面する尖鋭的問題も、影を潜めるに至っているのである。作者は、この田園の、伝統的生活様式に対し、讃美と擁護の姿勢を取っているのは、疑い得ないことである。主人公は、農村の慣習的思考、モラル規範を含めて、その伝統の権化であるが故に、個人と共同体との間に、対立はあり得ないのである。又、女主人公も、物語の前半に於ては、その都会志向の虚栄心の為に、自他に災を招くが、‘Her simple country nature, fed on old-fashioned principles’ (p. 337) の故に救いがあるとされる。

Joseph W. Beach が、いみじくも指摘している様に、「作者の構想の中では、背景がプロットより先に生れ、プロットを作り出しているのは、背景であると、推測してよい。」<sup>⑦</sup> 前景のプロットは、背景に吸収されるのであり、背景が、主題そのものであると言うべきであろう。ハーディは、変貌して、伝統的生活様式が崩れ、調和と安定を失いつつある、現実の農村の状況に直面して、ノスタルジックに、このウェザーベリに、理想世界の香気漂う農村生活の諸風景を描き出し、その美と価値を謳い上げたと言ってよい。そして、これが、ウェザーベリに依って表わされる、彼の「ウェセックス」の初登場の意味である。「ウェセックス」は、ハーディの ‘dream-country’ (vi) であったのであり、彼のアルカディア——それは、決して古典的、伝統的黄金時代のアルカディアではなく、近代の状況の中での、彼独自の精神を反映した、リアリストティックで、地味にして節度あるものであるが——として、此処に出発したのである。

以後の、ハーディの主要作品は、此処に誕生したアルカディアが、内外両面から、次第に崩されて行く姿を描くのであり、それに応じて、各作品は、悲劇的色彩を濃くしてゆく、と略述し得るのである。

註〔Text は Macmillan の The Greenwood Edition を使用〕

- ① F. E. Hardy : *The Life of Thomas Hardy*, p. 95 (Macmillan, 1965)
- ② Ibid., p. 98
- ③ M. Williams : *Thomas Hardy and Rural England*, p. 130 (Macmillan, 1972)
- ④ R. Morrell : *Thomas Hardy : The Will and the Way*, p. 64 (University of Malaya Press, 1965)
- ⑤ M. Millgate : *Thomas Hardy : His Career as a Novelist*, pp. 98-104 (The Bodley Head, 1971)
- ⑥ J. W. Beach : *The Technique of Thomas Hardy*, p. 62 (Russel & Russel, 1962)

(昭和51年9月30日受理)